

PAT-NO: JP357012561A
DOCUMENT-IDENTIFIER: JP 57012561 A
TITLE: FIELD EFFECT TRANSISTOR
PUBN-DATE: January 22, 1982

INVENTOR-INFORMATION:

NAME

OTSUBO, MUTSUYUKI
MITSUI, YASURO
NAKATANI, MASAOKI

ASSIGNEE-INFORMATION:

NAME

MITSUBISHI ELECTRIC CORP

COUNTRY

N/A

APPL-NO: JP55088134

APPL-DATE: June 26, 1980

INT-CL (IPC): H01L029/80, H01L023/12

US-CL-CURRENT: 257/741, 257/E21.511

ABSTRACT:

PURPOSE: To mitigate stress to be applied to the respective electrodes and the semiconductor chip of a field effect transistor by a method wherein the thickly plated source electrode and the thickly plated drain and gate electrodes are made of materials having thermal expansion coefficients different to each other.

CONSTITUTION: The difference of height between the upper face 2' of the convex part 2 of a heat sink 1 of Cu to be used as a package or a chip carrier and the upper faces 3', 4' of alminas 3, 4 is about 0.2 μ m even when heated at about 100 \deg C. When the source electrode 6a is made of Pt, and

the drain
and gate electrodes 7a, 8a are made of Sn, the difference of height
between the
electrodes becomes about $0.063\mu\text{m}$, and moreover because the Young's
modulus
of Sn is about a half of Au used up to this time, tensile stress is
reduced
broadly, and break away and increase of resistance between the
respective
plated electrodes and junction pads of the chip and between the
respective
upper faces of the package or the chip carrier are prevented.

COPYRIGHT: (C)1982, JPO&Japio

⑬ 日本国特許庁 (JP)

⑭ 特許出願公開

⑫ 公開特許公報 (A)

昭57-12561

⑮ Int. Cl.³
H 01 L 29/80
23/12

識別記号
庁内整理番号
7925-5F
7357-5F

⑯ 公開 昭和57年(1982)1月22日

発明の数 1
審査請求 未請求

(全 3 頁)

⑰ 電界効果トランジスタ

機株式会社北伊丹製作所内

⑱ 特 願 昭55-88134

⑲ 発 明 者 中谷正昭

⑳ 出 願 昭55(1980)6月26日

伊丹市瑞原4丁目1番地三菱電
機株式会社北伊丹製作所内

㉑ 発 明 者 大坪睦之
伊丹市瑞原4丁目1番地三菱電
機株式会社北伊丹製作所内

㉒ 出 願 人 三菱電機株式会社
東京都千代田区丸の内2丁目2
番3号

㉓ 発 明 者 三井康郎
伊丹市瑞原4丁目1番地三菱電

㉔ 代 理 人 弁理士 葛野信一 外1名

明 細 書

1. 発明の名称

電界効果トランジスタ

2. 特許請求の範囲

半導体チップの同一主面上のソース(エミッタ)、ドレイン(コレクタ)およびゲート(ベース)各電極のそれぞれボンディングパッド上に設けた各厚メッキ電極を、パッケージあるいはチップキャリアの対応する各電極に直接々接続させた電界効果トランジスタにおいて、前記パッケージあるいはチップキャリアの絶縁物上のメタライズ層に接続される前記ドレインおよびゲートの厚メッキ電極材料を、パッケージあるいはチップキャリアのヒートシンクに接続されるソースの厚メッキ電極材料よりも熱膨張係数の大きい材料としたことを特徴とする電界効果トランジスタ。

3. 発明の詳細な説明

この発明は電界効果トランジスタ、特に半導体チップの各電極とパッケージあるいはチップキャリアの各電極とを、ボンディングワイヤの介在な

しに直接々接続するようにした、いわゆる完全フリップチップ型の電界効果トランジスタに関するものである。

以下、フリップチップ型砒化ガリウム電界効果トランジスタ(以下単にGaAs-FETと称する)を例にとつて述べる。

まず従来のこの種のGaAs-FETにつき、第1図および第2図により説明する。

これらの第1図および第2図において、(1)は中央部に凸部(2)を有し、かつその左右にアルミナあるいはベリリヤなどの絶縁物(3)、(4)を設けたCaヒートシンクであり、凸部(2)の上面(5)と、各絶縁物(3)、(4)のAuを一部メタライズした上面(3)、(4)とを電極に用いると共に、これらの各上面はすべて所定のレベル面にあるようにしている。また(5)は同一主面上のソース(エミッタ)、ドレイン(コレクタ)およびゲート(ベース)各電極のそれぞれボンディングパッド上に、通常はAuによる厚メッキ電極(6)、(7)および(8)を設けたGaAs-FETの半導体チップであり、これらの各電極(6)、(7)および(8)は、

前記パッケージあるいはチップキャリアとしてのヒートシンク(1)の対応する上面(2)、(3)および(4)に、熱圧着法あるいは半田付け法により接続される。

ここでこのように構成されるGaAsFETにおいては、チャネル温度120~150℃で使用されるために、ヒートシンク(1)および半導体チップ(5)の各自体の温度がかなり上昇し、ソースが接続される部位と、ドレインおよびゲートが接続される部位とにあつても、それぞれの構成材料の熱膨張係数の差異により、前記上面(2)と(3)および(4)との間に、第2図からも明らかなように段差を生じ、各厚メッキ電極(6)、(7)および(8)が圧縮あるいは引張り応力を受けることになり、結果的に各厚メッキ電極と、そのボンディングパッドあるいはパッケージ、チップキャリアとの接着が弱い場合には、その部分の電気抵抗が増し、甚しいときは電極が剥離するという問題があつた。

ちなみにAuが受ける応力を計算してみる。ここでCuからなる凸部(2)の高さおよびセラミック(Al_2O_3)の厚さを200 μm 、Auからなる厚メッキ電極

の厚さを30 μm とし、またCuおよび Al_2O_3 の熱膨張係数をそれぞれ $16.8 \times 10^{-6}/deg$ 、 $6.5 \times 10^{-6}/deg$ 、Auのヤング率を $8.3 \times 10^4 kg/cm^2$ とし、全体の温度が100℃上昇したと仮定すると、凸部上面(2)と絶縁物上面(3)および(4)との段差は、

$$\Delta(h_{Cu} - h_{Al_2O_3}) = h \times \Delta T \times (\beta_{Cu} - \beta_{Al_2O_3})$$

で与えられ、これに実質数値を代入すると0.20 μm となる。

そしてこの場合、ソース厚メッキ電極(6)が0.20% = 0.10 μm だけ圧縮され、かつドレインおよびゲート厚メッキ電極(7)、(8)が同様に0.10 μm だけ伸びると仮定すると、ソース厚メッキ電極(6)に加えらるる圧縮応力 σ は

$$\sigma = \epsilon E_{Au}$$

ここで ϵ は歪、 E_{Au} はAuのヤング率で与えられ、同様に実質数値を代入すると単位面積(cm^2)当り $6 \times 10^2 kg/cm^2$ となる。これは例えばソース電極面積 $2 \times 10^2 \mu m^2$ に約12gの力が加えられていることを意味する。

このように微小面積に過大な応力が加えられる

ことになり、従つてこの応力を緩和するのには、前記上面(2)と(3)、(4)との温度上昇に伴う段差を少なくすることが重要である。

この発明は従来のこのような点に鑑み、ソース厚メッキ電極とドレインおよびゲート各厚メッキ電極とに、それぞれに異なつた熱膨張係数の材料を用いることにより、各厚メッキ電極、ひいては半導体チップに加えらるる応力を緩和し得るようにしたものである。

以下この発明の一実施例につき、第3図を参照して詳細に説明する。

この第3図において前記第1図および第2図と同一符号は同一または相当部分を示しており、この実施例ではソース厚メッキ電極(6a)としてPt、ドレインおよびゲート厚メッキ電極(7a)、(8a)としてSnの各材料を用いたものである。

この第3図に示した実施例によるGaAsFETの各厚メッキ電極(6a)と(7a)、(8a)とに加えらるる応力について、前記と同一条件で計算してみる。

まずパッケージあるいはチップキャリアとして

のCuヒートシンク(1)の凸部上面(2)と絶縁物上面(3)および(4)との段差は、先に計算したように0.20 μm である。また一方、半導体チップ(1)上のソース厚メッキ電極(6a)の伸びは、Ptの熱膨張係数が $8.9 \times 10^{-6}/deg$ であるから $2.7 \times 10^{-2} \mu m$ 、ドレインおよびゲート厚メッキ電極(7a)、(8a)の伸びは、Snの熱膨張係数が $2.7 \times 10^{-6}/deg$ であるから $9.0 \times 10^{-2} \mu m$ で、その差0.063 μm となる。

すなわち、このようにして、ソース電極とドレインおよびゲート電極との段差が厚メッキ電極の伸びの差分だけ少なくなり、またSnのヤング率がAuの約 $\frac{1}{2}$ 程度であるために、Auを用いた場合に比較してドレインおよびゲート厚メッキ電極に加わる引張り応力が大巾に減少され、単位面積(cm^2)当り $1 \times 10^2 kg/cm^2$ となつて、前記従来の約 $\frac{1}{2}$ 程度に軽減されており、各厚メッキ電極と半導体チップのボンディングパッドおよびパッケージ、チップキャリアの各上面との間が剥離することはなく、また電気抵抗の増加も殆んどなくなるなどの効果を奏し得たものである。

なお前記実施例はGaAsFETについて述べたが、これに限られず他のデバイスについても適用可能であり、また実施例ではPtとSnとの組み合わせにつき説明したが、これに限られず他の組み合わせ、例えばPtとAu、AuとSnなどの組み合わせについても適用できることは勿論である。

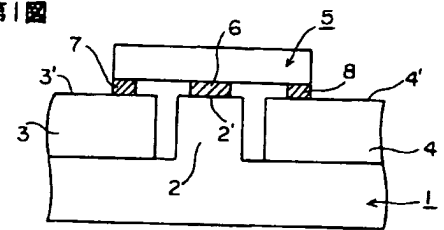
4. 図面の簡単な説明

第1図は完全フリップチップ型のGaAsFETの断面図、第2図および第3図は従来例およびこの発明の一実施例による同上GaAsFETを高温下に保持したときの半導体チップとパッケージ、チップキャリアとの状態を示す断面説明図である。

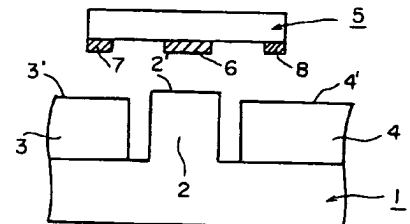
(1)・・・パッケージ、チップキャリアとしてのヒートシンク、(2)、(2')・・・凸部とその上面、(3)、(3')および(4)、(4')・・・絶縁物とその上面、(5)・・・半導体チップ、(6)、(6a)・・・ソース厚メッキ電極、(7)、(7a)および(8)、(8a)・・・ドレインおよびゲート厚メッキ電極。

代理人 葛 野 信 一(外1名)

第1図



第2図



第3図

